

「男、突っ走る！」

第
112
回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

国枝	高橋	稲本	磯村	林田	石松	辻澤	赤澤	林原	加原	北原	加原	弘田	上島	上島	木内
茉奈	沙耶	美香	秀樹	香奈枝	琴音	隆翔	隆太	亜里沙	千世	まひる	美穂子	理洗	讓治	雅也	
(28)	(13)	(11)	(17)	(11)	(11)	(12)	(12)	(13)	(14)	(23)	(36)	(24)	(29)	(36)	(25)

佐代子の娘

『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』メンバー	『スリジエネ』会計担当兼メンバー	『スリジエネアカデミー』歌唱講師	『スリジエネアカデミー』演技講師	『スリジエネアカデミー』演技講師	『オフィスツリーイン』代表
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	------------------	------------------	------------------	------------------	---------------

1 住吉ダンススタジオ

マスクをした雅也が入ってくる。

雅也「おはようございます」

既に来ていたまひる、美穂子、千世、

亜里沙、香奈枝、隆太、翔、琴音、秀

樹、美香、沙耶が迎える。一同、マス

クをしている。

一同「（口々に）うちー」

雅也の前に群がる亜里沙、香奈枝、隆

太、翔、琴音、美香、沙耶。

雅也「おはよう。みんな、元気だった？」

隆太「どうしたの、うちー。ずっと来てな

かったのに」

雅也「ごめんね。仕事のほうがバタバタしち

やっつてね」

翔「良かった。今日からうちーも一緒だ」

雅也「あれ、翔しばらく見ないうちに大きく

なった？」

翔「身長伸びた」

雅也「まあ、これから成長期だもんね。（と

亜里沙と沙耶を見て）アリサもサヤも、やっぱり中学生になると、大きくなった気がするね。どう、中学校生活は」

亜里沙「みんなマスクしてるから顔が分からない」

沙耶「目から上しか分からないもん」

雅也「そうだよね。顔が分かる子なら良いけど、まだそんなに知り合って間もない子はどんな顔してるか分からないもんね」

琴音「給食の間も、喋っちゃいけないの」

雅也「ああ、マスク取った状態で話していると、感染する可能性があるってことだもんね」

香奈枝「今年も琴音ちゃんと同じクラスだけど、休み時間もあまり集まって遊んじゃダメだって先生が……」

美香「学校、つままない」

雅也「みんなも大変だったね。スリジェネアカデミーも、しばらくは換気をちゃんとして、消毒やマスクもして、徹底した感染防止でやらなきゃいけないから、なかなかレ

ッスンもやりづらいと思うけど、いつかはちゃんとマスクを撮って、ダンスも歌も演技もできるようになる日が来ると思うよ。特に演技なんてマスクしてたら、表情分かんないもんね」

美穂子「ダンスも、表情で表現するときがあるから難しいんですよ」

雅也「そういえば、来月ここのダンス教室の公演ありますけど、予定通り開催するんですか」

美穂子「もちろん。舞台上に上がる間は、マスクじゃなくて、フェイスシールドをつけて出ることになります」

千世「あれも、意味あるのかな？ ダンスレッスンの間もフェイスシールドつけるけど、邪魔でしようがなくてさ」

雅也「まあ、何もつけなかったら悪く言われちゃうからね。体裁上は、感染対策をちゃんとしてますってことをやらないとき。いろいろ言われるから」

秀樹「『マスク警察』って言葉もあるんだよ」

雅也「何、『マスク警察』って？」

まひる「あれ、うちー知らないんですか？

その名前の通りですよ。マスクをしてない人をああだこうだ言っつて文句を言う人たちのことです」

雅也「住みにくい世の中になっちゃうね。これじゃあ、コロナが怖いのか、マスクをつけてなくて批判してくる世間の目が怖いのか、何に怯えてるのか分かんないね」

まひる「それぐらい、コロナで人は変わっちゃうっつてことですよ」

雅也「いつになったら、終息するんだろうね。これから、また第二波とか第三波になったらどうなっちゃうんだろう」

と、讓治と理絵が入ってくる。

讓治・理絵「おはようございます」

一同「おはようございます」

讓治「お、うちー来てるじゃん」

雅也「仕事の都合で、しばらくお休みいただ

きました。今日からまたレッスン復帰します。よろしくお願ひします」

理絵「もうみんな、うちーのこと待ち構えてたのよ」

雅也「え？」

美穂子「うちーはまだ来れないのか、っていつも言ってたのよ」

雅也「そんなに？ ああ、美穂子さんも仕事の方大丈夫でしたか？ 保険の営業も、コロナで全然できなかったんじゃないですか？」

美穂子「まあ、以前みたいにバリバリ営業はかけられなかった。だから、インターホン越しにひたすら話したり、契約更新とかだと書類を郵送して、電話でお客さんに説明したりね…直接会えばスムーズに行くものが全然できなくて。仕事のリズムも狂っちゃったわ」

雅也「仕事のやり方も、コロナで変わっちゃいますね」

譲治「そうだね……。 (と一同に) さ、時間になりました。レッスンを始めます」

一同、譲治と理絵の前で直立になる。

譲治「では今から演技基礎レッスンを始めます。よろしくお願ひします」

一同「よろしくお願ひしますッ」

2 カフェ『レインボー』・店

茉奈がレジ打ちをしている——奥で店員が調理や接客をしている。

客が出ていく。茉奈、それへ、

茉奈「ありがとうございます」

店員たち「ありがとうございます」

と、雅也とまひるが来店してくる。

茉奈「いらつしやいませ。ああ、二人とも来てくれたんだ」

雅也「しばらくでした。オープンの時は、顔も出せずに失礼しました」

茉奈「良いの。あの時は、状況も状況だから、市をまたぐことも億劫になってたもんね」

まひる「うっちー、今日からアカデミーレッスン復帰したんです。久しぶりにこっちに来たので、レッスン終わりに二人でお茶しようってことになって」

茉奈「ありがとう。あ、今日お母さん、仕事でいないのよ」

雅也「大丈夫です。会議やレッスンで、また会えますから」

茉奈「さ、どうぞ。（とテーブル席へ案内すると）ご注文はどうされますか？」

雅也「インスタで見た、ドーナツセットで」
まひる「私もそれをお願いします」

茉奈「お飲み物は？」
雅也「アイスコーヒーで」

まひる「じゃあ、私はアイスラテで」
茉奈「はい、かしこまりました」

× × ×

それぞれドーナツを食べたり、時折飲み物を飲みながら雅也とまひるが話している。

雅也「まひるのところも大変だったでしょ」

まひる「そうなんです。鰻屋として、お座敷とかをよく最賃にしてくださる団体さんもいらっしやっただんですけど、コロナで集團の会食もダメになったでしょ。家族総出で何とかしようと思って、テイクアウト始めたんですよ。うちはずっと、焼き立ての鰻をその場で食べていただくのを売りにしてたんですけど、この状況じゃそんなことも言ってもらえなくて。弟も大学がしばらく休みになっちゃったんで、それで自転車漕いで地域に配達するようになったんですよ」

雅也「ああ、新聞に載ってやつだ」

まひる「それです。私も、この四月で就職ができましたけど、結局リモート対応になっちゃって」

雅也「確か、工場の設計部門だったけ？」

まひる「はい。日中は当然仕事しますが、特に残業とかもないので、夜になったらそのまま家業を手伝うって感じに」

雅也「これから、テイクアウトは需要が増えてくだろうね」

まひる「うちーも、いろいろ新しいこと始めたんですよね？」

雅也「そうなの。それこそ、まひるの家じゃないけどさ、飲食店はコロナのせいで大打撃食らったでしょ。だから、地元で何とか経済が回るようなことができないかと思つて、テイクアウトとか店舗情報を無料で掲載できる特設ホームページを作ったの。更新もそんなに複雑じゃないから、いろんな情報がアップできるしね」

まひる「地元の新聞に載ったって、SNSでアップしてましたもんね」

雅也「まああれも、自分でプレスリリース作って、地元の新聞社にFAXしたただけなんだけどね」

まひる「その行動力がすごいですよ」

雅也「一応、広告制作事務所やってる人間だし、スリジェネの事務局もやっていますから

ね」

まひる「そうでした」

雅也「あとね、作文教室のオンラインページ

ヨンも始めたの」

まひる「やっぱり、これからはオンラインな
んですね」

雅也「コロナが来る前までは、公民館とかお
寺の部屋を借りて作文教室やってたんだけ
ど、やっぱり今はそういうの無理になった
でしょ。だから、リモートでもできるよう
にしようと思ってね。そしたらさ、ミオが
受けたいって連絡くれたの」

まひる「へえ、ミオちゃんがですか」

雅也「うん。この春で、ミオ高三になったで
しょ。学校で、進学希望する大学のPR文
を書く宿題が出たんだけど、どうやって書
いて良いか分からないからって」

まひる「こういう時、文章の専門家がいると
心強いですよね。私も、受けてみようかな」

雅也「お、まひる受ける？」

まひる「確か、エッセイとかもやるんですよ
ね」

雅也「そうだね。大人の人向けには、エッセイを書いてもらってる。それに、ただエッセイを書いて終わりって感じじゃなくて、実際に行われてる公募とかコンクールに出すことを目的にしてるの」

まひる「確かに、そういうのに出すっていう目的があると書くこうって気持ちになりますもんね」

雅也「コロナ前にやったときは、中高年の方が多く来てくださってね。定年後に興味で文章を書きたいから文章力を上げたいって方とか、仕事で事務職をしてる方が仕事での文章力を上げたいって方とか、結構いろんな目的で来られたの」

まひる「ああ、私もまさにそれなんですよ」

雅也「どういふこと？」

まひる「日報が書けないんですよ」

雅也「日報って、普通に一日仕事して起きた

出来事を書けば良いだけじゃん」

まひる「うちーは文章の専門家ですから、簡単に言いますが、大変なんですよ、文章書くのって」

雅也「頭の中で言葉とかイメージが浮かんでも、それを文章に起こすのが難しいって言うのはよく聞くけど、あれやっぱ本当なんだ」

まひる「まさしくそれです。頭には浮かんでるんですよ、でもそれが文章にできなくて……」

雅也「分かった。じゃあ、また今度オンライン教室受けに来て」

まひる「はいッ。あ、そういえば、最近藍那さんと連絡取ってます？」

雅也、コーヒーをむせて咳き込む。

まひる「大丈夫ですか？」

雅也「急に、何聞くの？」

まひる「いや、最近どうかと思ってる」

雅也「連絡っていう連絡は取ってないかな」

まひる「ダメですよ、ちゃんと取らなきゃ」

雅也「どうして？」

まひる「大事にしてあげてくださいよ」

雅也「別に付き合ってるわけじゃないんだから」

まひる「でも、大事なお友達でしょ？」

雅也「そうですね」

まひる「ちゃんと連絡してあげてください。

友達からの連絡って嬉しいものなんですか

ら

雅也「連絡しときます」

N「それから数日後、まひるは僕のオンライン作文教室を受けてくれました。そして、まひるの言う通り、藍那にも近況報告のLINEを送りました」

3 住吉ダンススタジオ（一週間後）

洸が電子ピアノを弾いている——音楽に合わせて歌っている雅也、まひる、

美穂子、千世、亜里沙、香奈枝、隆太、

翔、琴音、秀樹、美香、沙耶。

洸「うっちー、ヒデ。もう少し共鳴を意識してみて。変に喉から声を出そうとすると声が潰れちゃうから、演技と一緒にお腹から出すことを意識してみて」

雅也・秀樹「はい」

洸「女性陣。もっと歌詞の意味を読み取ってみて。音程を合わせることで、ただ歌うことと意識が行っちゃってるから、棒読みみたいなになっちゃってる。感情があまり出ない気がするから、歌詞に合わせて歌ってみて。特にこの歌は明るい歌だから、もっと楽しそうに。ワクワクする気持ちが、見える側にも伝わるようにやってみて」

女性陣「はい」

洸「はい、じゃあもう一度行きましょう」

と、ピアノ伴奏を始め、一同それに合わせて歌いだす。

4 同場所

雅也、まひる、秀樹、隆太、亜里沙が
即興劇をしている——体操座りでの
様子を見ている譲治、理絵、美穂子、
千世、香奈枝、翔、琴音、美香、沙耶。

N 「歌やダンスのレッスンは一同相変わらず
苦戦していましたが、メンバーのみんなが
一番楽しくしていたのは、演技レッスンで
行われていたエチュード、つまり即興劇で
した。僕自身も、即興で設定を考えて、セ
リフを言うことは、脚本の参考になると思
っていました。また、小学生メンバーたち
がちゃんと即興で設定とセリフを考え、そ
れぞれキャラクターを作り上げて演技をす
ることに、僕は演じながらも驚きを隠せま
せんでした」

5 同・表

N 「それから、しばらく経ったある日のこと
……」

雅也、洸、翔、琴音が立ったまま話し

ている。

雅也「国枝さんから連絡が来た、映画企画の話、どうする？」

琴音「私、受ける」

翔「俺も、受けてみようかと思ってる」

雅也「（洗に）洗先生は？」

洗「国枝さんからは、講師だけどせつかくだから受けてみないかって言われてる。うっちーも受けるの？」

雅也「一応受けるだけはね。けど、映画企画ってなると、撮影のスケジュールもあるから、チョイ役で良いんですけどね」

洗「まあ、それは俺も同じだな」

琴音「そういえば、国枝さんが言ってた、横

田監督ってどんな人なの？」

雅也「うっちーもね、名前だけは聞いたことがあるの」

琴音「そうなの？」

雅也「翔は分かると思うけど、『神様の願いごと』の脚本と演出をしたヤマさんってい

たでしょ」

翔「うん」

雅也「ヤマさんは、その横田監督の映画の作品に出たことがあるんだって。今、大学院生で、多分年齢で言えば、洸先生と同じ年なはず」

洸「へえ、それは知らなかった」

雅也「現役の大学院生だけど、これまで短編や長編の自主映画を何本も制作して、映画祭に出展して賞を取ったこともあるんですけど。それに、この地域で活動するアーティストのミュージックビデオも手掛けたこともあるみたいで」

洸「じゃあ、結構大きな規模になりそうなのかな？」

雅也「国枝さんの話だと、今回の映画企画が横田監督の学生生活最後の卒業制作になるんですって。それで、『スリジェネアカデミー』に出演の協力要請が来たみたいで。

僕も、この間の運営会議で国枝さんから聞

かされたばかりなので、詳しいことはまだよく知らないんですけど」

洸「まあ、今のメンバー的に、琴音はメインだろうな」

琴音「え、私？」

洸「俺もいろんな現場見てきたから分かるんだけど、琴音は映像でも映えると思うんだよ。（と雅也に）『スリジェネ』も、これからは映像で何かをやることを考えても良いかもしれないね」

雅也「じゃあ、今度の会議でぜひ、ご提案を」

洸「俺が？」

雅也「言い出したのは、洸先生じゃありませんか」

洸「そこは運営としてうっちーが言ってくれたほうが」

雅也「ああ、またそういう話を俺にさせようとするんだもんなあ」

琴音「（奥を見て）あ、お迎え来た。じゃ、私はこれで」

雅也「じゃあね」

翔「じゃあな」

洸「また来週」

琴音、横断歩道を渡って去っていく。

翔「じゃあ、俺も帰ります」

雅也「お疲れねえ」

洸「また来週」

と、止めてあつた自転車に乗って、ヘルメットを被って、去っていく。

雅也「俺たちも帰りますか」

洸「メンバーもみんな帰ったし、タメ口に戻すか？」

雅也「そうだね」

雅也と洸、道を歩きながら、

洸「よし。うっちー、最近どうよ」

雅也「リモート会議とか、オンライン作文教室とかをね。洸こそ、コンサートとか中止になっちゃったんじゃないの？」

洸「そうなんだよ。俺もね、自分の音楽教室でリモートレッスン始めたんだけど、やつ

ぱりオンラインだと、ちゃんと正確に声を聞きとれないから、指導方法が難しくて」

雅也「歌は特にそうだよね」

洸「映画の撮影も、コロナ対策万全な状態でやるんだろうね」

雅也「演劇と比べたら、ある意味人数を減らしてできるから、やっぱり映像で何かをするのはアリなのかもしれないね」

洸「そうだよねえ」

N「国枝さんが持ってきた映画企画の話。チヨイ役ならば出ようと思っていたのですが、これがまた僕にとって大きな挑戦の機会になるのです」

つづく